Your COFFEE CUP Bring our LIFE UP!!

Your COFFEE CUP – Bring our LIFE UP！

スリランカコーヒー 1000トン産業化の夢と希望

シリーズ 1

スリランカコーヒーを世界のブランドコーヒーへ

清田 和之
一般社団法人 日本フェアトレード委員会 理事長

FAIR TRADE

スリランカコーヒー 1000 トン産業化の夢と希望　シリーズ①

スリランカコーヒーを世界のブランドコーヒーへ

はじめに

スリランカコーヒーを世界のコーヒーブランドにする。

とても大きな夢のような話である。

これを単に夢で終わらせるのではなく、現実にしなければならない。これまでもこれからも、私は夢と希望を持ち続けて活動していく。そんな気持ちをこめて、このパンフを“夢と希望シリーズ”と名付けた。

スリランカコーヒーを世界のブランドコーヒーに。このパンフは、大きな夢に向かうその軌跡である。

スリランカにはスリーパーダという山がある。世界の宗教の仏教、キリスト教、イスラム教、ヒンズー教の聖地で、4 つの宗教徒が登る山でその頂上にはそれぞれの教えの本尊が祀られている。私のスリランカ訪問のテーマ、まさに平和、公正祈願の原点となる山である。

そんな本来平和な島国であるはずのスリランカでテロ事件が起こった。

2019 年 4 月 21 日、スリランカでテロが発生し多くの人たちが死傷した。コーヒー復活の夢を目指して活動している自分には大変ショックなことだった。日本から真っ先にスリランカの事件の真相や、テロへの対応、そしてスリランカの状況を調べた。キヨタコーヒーカンパニーのことも気がかりだった。

もともと 2019 年 5 月 24 日に中国東方航空でスリランカ渡航を予定していたのだが、コロンボ空港への運航はキャンセルになった。

いつも使っている上海経由コロンボ行きの中国東方航空は、飛ばなくなってしまった。仕方なくバンコク経由の別便で 6 月 10 日に飛行機でコロンボ空港へ到着した。テロの発生から 50 日が経過していたが、影響はコロンボ空港に現れていた。こんな空港の状況は初めてというくらい少なかった。ホテルまでタクシーで行ったが、運転手はお客が少なく収入が極端に減ったと言っていた。いつも宿泊するホテルでもお客が少ないと嘆いていた。

テロによる観光客の減少はコーヒー需要に直接影響していた。ホテルの外国人用のコーヒーが軒並みダメになり、我がキヨタコーヒーカンパニー（KCC）にも大きな影響が出ていた。

今回のテロでスリランカには深い傷跡が残った。傷が癒えるには長い時間がかかるであろう。しかし、スリランカでは、若者を中心に、人々がテロに負けまいと立ち上がり、頑張っている。

夢と希望。私は今こそ、コーヒー復活を通してスリランカを応援し、再び元気なスリランカを取りもどしてほしいと願っている。そのためにも、スリランカの人々とともに私も夢と希望を持ち続けたい。

清田 和之
一般社団法人 日本フェアトレード委員会 理事長

第1章　ブランド価値のあるスリランカコーヒー

1．歴史から消えたスリランカコーヒー

数百年続いたスリランカコーヒーを復活させる試みが、今始まっている。歴史からなくなったコーヒーが現在に至り再度甦る。ここにスリランカコーヒーの生命力とブランド価値が隠されている。

スリランカコーヒーは、オランダの植民地時代に栽培が始まり、イギリスによって最盛期になった。しかし、イギリスによってコーヒーが栄えたにも関わらず、そのイギリス植民地のもとで紅茶に変わっていってしまった。そこに、スリランカコーヒーが他の生産国と違う稀有なものであり、そのコーヒーの歴史こそ秘められたブランドになりうる価値が存在する。

このような歴史のあるスリランカは 3 つの国から植民地にされたが、この 3 つの国がそれぞれスリランカコーヒーと関係している。ポルトガルの植民地が始まる時、スリランカには1503年、アラビカからコーヒーが伝わったとある。そしてオランダ植民地が始まると同じ時に、コーヒー栽培が行われた。1800 年代からイギリス植民地時代が始まると、スリランカコーヒー生産は隆盛を極め、1870 年頃、世界第 3 位のコーヒー生産国になった。しかし、以降コーヒーがなくなり、紅茶に変わり、現在に至ったという歴史がある。

	植民地支配	コーヒー	紅茶
1500 年代	ポルトガル時代		
1658 年	オランダ時代	コーヒー栽培始まる	
1800 年代中頃	イギリス時代	コーヒー最盛期	
1870 年	↓	コーヒー衰退	強制移住・労働
1900 年代	↓	**コーヒー滅亡**	紅茶栽培盛ん

スリランカには植民地時代からこのようなコーヒーの歴史があるが、1972 年、セイロンからスリランカという国名になり、独立を勝ち取った。そんなスリランカ国が稀有な歴史をつくろうというのが、現在目指している 1000 トンのコーヒーの復活である。それは、コーヒーが紅茶に変わってしまったスリランカで、もう一度昔のようにスリランカ中山間部の丘陵の国土にコーヒーを蘇らせるというものである。そして、そのスリランカコーヒー復活はフェアトレードを軸とするコーヒーである。

フェアトレードは、スリランカの発展に寄与することであり、私にとっては、セイロンコーヒー復活物語であると言える。

このようなスリランカコーヒーを復活させたいという発想は、どうして生まれたのか。それは、私がブラジルのコーヒー園を旅し、世界のコーヒーを学ぶときに起こった「コーヒー危機」と言われるコーヒー生産者の状況とフェアトレードを知ってからである。

私がスリランカコーヒー復活を求め、スリランカに足を踏み入れたのは、2002 年 3 月 3 日だった。それからスリランカコーヒー復活の活動が始まった。

2．100トンのスリランカコーヒー

2002 年、スリランカを訪れた当時、スリランカコーヒーを復活させてコーヒーを一つの産業にしようというのは妄想のような思いだけだった。スリランカコーヒー復活を海外事業として夢見たが、スリランカの経済や紅茶とコーヒーのことを知るにつれ、とてつもない事業に着手したことが次第にわかってきた。その夢の実現を考えると気が遠くなるようなことであった。

私がやろうと決めたことは、コーヒーの植栽から貿易までのコーヒー事業であった。どこの国のコーヒー産業も、もともと政府国家のやることで、私のような個人がやることではない。コーヒー栽培は長年時間をかけ、さらに消費国へ貿易となると、コーヒーのノウハウを獲得することなど、途方もなく時間を必要とする。歴史がなければできないことだ。ゴールに行きつくことはできるのか、ゴールがどこかも定かでない。

スリランカで自分の行く、コーヒー復活の方向に疑問を持つこともあった。しかし、自らスリランカコーヒーの復活とスローガンを掲げたからには、世間にも私の著書『コーヒーを通して見たフェアトレード～スリランカ山岳地帯を行く』を出したり、『スリランカ幻のコーヒー復活』のパンフレットも作った。

2010 年に出版した著書（書肆侃々房刊・左）とパンフレット（右）。

世界のコーヒーは南北緯度 25 以内の南の国で生産されている。コーヒーは南の国の貿易品として、世界の国々を相手に成長してきた。国家的事業で行われ、長年かけて国の貿易産業となってきたのがコーヒーである。

スリランカコーヒーは、昔セイロンコーヒーとして世界第 3 位の生産国で一大産業となっていた。セイロンコーヒーとして、世界に君臨したコーヒーの歴史を、再度取り戻すなんてとてつもないことだ。コーヒーは、苗づくりから始まり、植え付け、そして成長し実を付け収穫される。それまでに3～4年という時間がかかる。収穫されたコーヒーの実は加工され、製品化される。労働力、プロセスは途方もなく、膨大で国家的事業規模となる。

私が向こう見ずにスリランカ幻のコーヒー復活を唱え、スリランカに飛び込んだのはあまりも大それたことで、リスクを多く抱えた冒険事業だった。

3．セイロンコーヒー滅亡

スリランカコーヒーがなくなることについて記されている文献は少なく、どのような経過でスリランカコーヒーが滅亡したか、その過程を探るのは困難だったが、やっとそのデータが見つかった。（資料１）

1870 年に 5.3 万トンあったコーヒーが滅亡するとき、ほぼ 30 年が経った 1899 年のデータは、2144 千ポンドである。さらに 1904 年には 740 千ポンド 333 トンにまで落ちている。1909 年には 190 千ポンド 85.5 トンにまで落ちる。凄まじい落ち方、まさに滅亡していく過程である。

まず、我々は 100 年前のスリランカのコーヒー貿易量 100 トンに戻すことから始める。これから目指す 100 トンのコーヒーとは、スリランカの 100 年以上前のコーヒーの歴史に戻すことである。100 トンに到達した後は、もっと高い所を目指すが、この表から見ると、1899 年、20 世紀のもっとも終わりには 964. 8 トンなので、おおよそ 1000 トンはその頃だろう。そうするとスリランカコーヒーの目指すところは、120 年前のコーヒー貿易である。

◆資料① コーヒーの貿易数量

年	千ポンド
1870	118,160
1889	9,966
1894	3,582
1899	2,144
1904	740
1909	190

第2章 スリランカコーヒーの復活の見通し

1. 変わるスリランカのコーヒー事情

現在になってやっとコーヒー貿易の見通しが見えてきた。2002 年から 17 年が経過し、スリランカコーヒー復活の思いから、少しずつスリランカのコーヒー事情が変わってきた。

最近 KCC(2017 年設立の kiyota coffee company) に、中国やその他の国からスリランカコーヒーに関心が寄せられている。中には 100 トン単位のスリランカコーヒーの注文もある。しかし、お断りするしかない。現状のコーヒー生産ではとても答えることができないからだ。1000 トンのスリランカコーヒーがあればできるが……と思う。現実はまったくそうではないので、それを目指さなければならない。

しかし、スリランカの政府や関係者は本当に売れるのか、と言う疑問を持つかもしれない。スリランカ政府は海外にコーヒー貿易をしたいと思っているが、不安も持っている。しかし、スリランカコーヒーには、世界で唯一無二の復活の歴史物語のある「復活コーヒーブランド」力があるから心配は何一ついらない。
しかし、その 1000 トンレベルにはスリランカ政府の協力がなければできない。最近になってスリランカ政府が、改良に成功した「ラクパラクン（スリランカの過去の王様の名前を冠したコーヒー種)」の栽培の奨励を始めた。

ここにくるまで、スリランカコーヒーにもどかしさを感じていた。それは、政府はコーヒー栽培を奨励はするが、その内容は、これまでも過去にあったことと同じでコーヒー栽培の種を農民に渡すということのみであった。二度と同じ轍は踏まないように、今度こそラクパラクンで成功させなければならない。
海外に輸出できる合格したコーヒーにするには、豆の収穫から豆の加工、そして輸出というところまで、品質をクリアしなければならない。

一連のコーヒーの加工技術を含めた政府のサポートや海外からのコーヒーの専門家が必要とされるが、その点は日本フェアトレード委員会（JFTC）が 2002 年から指導して、一定の設備や技術ノウハウをスリランカのコーヒーに導入してきた。そして、コーヒー貿易を成功させるが、その見通しはそう遠くはない、この数年間の間にできると思う。

アラビカコーヒーは 1000m 級の高さの所で育つが、その高度はスリランカの中央部で、主に紅茶の生産地となっている。スリランカでは、ヌワラエリヤのコーヒーベルト地帯と言われる所に育つアラビカコーヒー生豆は、良質で消費国から称賛される豆であるが、貿易量としては極めて少ないのが現実だ。この輸出のためのアラビカコーヒーを当面 100 トン、さらに 1000 トンを目標とする。

2. スリランカコーヒーの国内消費

スリランカ国内の飲み物は、圧倒的に紅茶である。紅茶生産国なので当然と言えば当然だが家庭でコーヒーはほとんど飲んでいない。コーヒーを飲む文化が育っていないのがスリランカの状況だが、最近では空港やマーケットにコーヒーも並び始めている。確実にコーヒーの文化はスリランカ国内に広がってきている。新しく現代的なコロンボにできた大きなマーケット（コロンボシティセンター）では、「コーヒー挽きたて」の販売の新しい試みを計画している。

キヨタコーヒーカンパニーが日本の焙煎機、ミルなど一連のコーヒーマシンをスリランカに導入し、日本のコーヒーの淹れ方を指導した。その成果もあり、スリランカにコーヒー文化が普及し始めている。
スリランカコーヒーを海外に出す前に、スリランカ国内のコーヒー需要をつくる試みがなされている。
コーヒーは主に海外からくる外国人を対象に需要が考えられているが、実際にはスリランカ国内にもコーヒー需要がある。それは、スリランカ人の口に合う飲み物、ミルクたっぷりのカフェオーレである。

スリランカ人は紅茶にしても甘い砂糖たっぷりのミルク入り紅茶にするが、それと同じように紅茶でなくミルクと砂糖の入ったカフェオーレはスリランカ人には人気である。それによりコーヒー需要が増えている。

スリランカは、国民所得や国の経済成長のもとで、コーヒーの国内需要も伸びて、あらたに政府のコーヒーの生産計画も見直されてきている。コーヒー栽培技術や加工技術など総合的なコーヒー栽培・生産のための施策を練ることも始められているが、世界遺産の街キャンディにナチュラルコーヒーの喫茶店が開設されたことと、JICA 草の根技術支援の活動が 3 年間ほど生産地で行われたこと、そしてキヨタコーヒーカンパニーの活動がスリランカコーヒーへの影響を与える結果となった。

日本から寄贈したコーヒー焙煎機を KCC のスタッフがピカピカに磨き上げて使用している。

3. コーヒー貿易の産業化

これまでもスリランカ政府は栽培奨励を何度もしてきたが、その計画の目標を実現するためには、幾つかのハードルをクリアしなければならず、一番のハードルはコーヒーの栽培計画の策定、収穫、それからコーヒー品質のためのコーヒー加工計画である。それと並行してコーヒー生産量増加である。
輸出のための貿易のマーケットは世界の消費国に広く存在する。

スリランカコーヒーが比較的高い価格で売れるためには、スリランカコーヒーをブランド化することだ。そして産業化のためには、目指すは 1000 トンのコーヒー貿易だ。

スリランカ政府主導による「コーヒー植栽計画プロジェクト 1000」の貿易輸出をスローガンとして進行することが重要だ。コーヒー産業化は 2005 年頃からのかなり早い段階から唱えていた。

スリランカのブランド政策の輸出産業とは、これまで紅茶、ゴムなどに限られていた。そこに私はコーヒー復活をして、スリランカの輸出ブランド産業としたいと考えた。その時は、妄想のような一人の思いに過ぎず先の見通しはまったくなかった。

アラビカコーヒーの生産は、当面の目標 100 トンのためにも、コーヒーを植栽し育てることが必要である。もともとアラビカコーヒーの木はわずかしかないので、それを増やさなければならない。

ではコーヒー 100 トンは、何本のコーヒーの木から収穫されるか。1 本のコーヒーの木から 1 kg の生豆が可能とすれば、100 トンは 10 万本の植栽が必要になる。コーヒー苗を育てて収穫まで 3 ～ 4 年かかる。つまり、10 万本植えると 5 年後には 100 トンのコーヒーの生産が可能だという計算が成り立つ。ただ、貿易品のコーヒーとなるには、その数倍～ 10 倍のコーヒーを植栽する必要がある。

私の 2002 年から 17 年までの 15 年間は、セイロンコーヒー復活のための探求の期間であった。長くかかったが、政府がコーヒーを海外貿易品にやっと位置付け始めたのはごく最近だ。スリランカにとってコーヒーを貿易品とするためには山ほど課題があるが、スリランカ政府支援も始まり、KCC と JFTC のメンバーでその方向を目指すことができるようになった。

これまでのことを思うと、貿易品となるコーヒー生産は目の前に近づいた感じで、ここまでやっとたどり着いたというのが率直な気持ちである。スリランカコーヒー復活に向けて、さらにこれからどうすべきか、さらに上を目指すようにスリランカに協力することが JFTC の使命であるとも思う。

ただ、個人的なことだが、1946 年 5 月 1 日生まれ満 73 歳の自分自身は、このコーヒー復活プロジェクトをどこまでできるか、悩むことが多い。しかし、スリランカの KCC が育ってきているのが現在の喜びである。コーヒー復活はスリランカの農民と KCC の現地法人、そしてスリランカ政府の協力なくしてはできない。そこで、セイロンコーヒー復活のビジョンである。

コーヒー復活活動の過去を振り返ると、お金だけでは解決できない時間と技術、忍耐、精神力など様々な能力が必要とされた。JICA 草の根技術支援事業に採択された活動が 2007 年 9 月～ 2010 年 3 月だった。

4．コーヒー産業創出の兆し

それから、毎年日本のナチュラルコーヒーにわずか 1 年で 500 kgから 1 トンくらいの貿易である。スリランカのコーヒー貿易は品質上において輸出できない状況が長く続いているが、現実は農民段階のコーヒー生産の問題を抱えてきた。

現在は新たに KCC にスリランカ国内で年間 20 ～ 30 トン程度のコーヒー注文が生まれている。コーヒーの焙煎はスリランカ国内でしなければならないが、日本で使っていた 8kg 中古焙煎機を KCC に持ち込んで、焙煎ができるようになった。さらに、今年からは一台焙煎機を追加し、さらに大きな注文に応えることができるようになった。KCC は、スリランカにおけるリーディングカンパニーとして存在感を示している。

スリランカにはコーヒー生産から紅茶の生産にとって変わってしまった、という過去の歴史があるため、日本製コーヒー焙煎機やコーヒー豆を粉砕するコーヒーミルなど、日本の様々なコーヒー知識や技術の導入を必要としている。KCC の支援の結果、スリランカコーヒーを美味しく飲めるようになり、現在はスリランカに来る外国人からもスリランカコーヒーの高評価をいただいている。

現在、スリランカにはヨーロッパや海外からの観光客が多く来ている。彼らがコーヒー消費需要の主役である。（注：現在はテロの影響で観光客は落ち込んでいるが、時間の経過と共に元に戻るだろう）

KCC のスリランカコーヒーが、国内だけでも 30 トンを消費するまでになっているのは、スリランカコーヒー事業の復活の兆しが現れたと思っている。

2010 年 3 月に終了した JICA 草の根技術支援事業は、繰り返すが、少なくともスリランカコーヒーのカフェブームに影響した。その間 2009 年 5 月に LTTEE と政府による内戦が終了したこともあり、スリランカに平和が戻った。それから街にはカフェの看板が目立ってきた。カフェだけでなく KCC 以外にも、小規模のコーヒー会社が幾つかできている。

スリランカは観光の島国で、世界の国ぐにから大勢観光客が来ているが、多くの観光客はスリランカは紅茶の国と思っている人がほとんどだ。だが「紅茶の前は、コーヒーだった」という歴史を知ると、驚きを示す外国人観光客は多い。

スリランカ国内にもコーヒーの取引先が増えている。

5．ラクパラクン改良コーヒー種で展望見出す

しかし、スリランカから海外に販売輸出しようとするところは現れない。海外への貿易チャンスを逃しているのが現在のスリランカであるが、1000 トンの海外貿易を見通せる、つながる可能性のある一つの新しい出来事があった。

これまでスリランカの豆には決定的な致命傷があった。それは、豆が赤く完熟する時期がまちまちで、一本の木から赤い完熟豆を収穫するのに、何度でも収穫しなければならず手間暇がかかる。一度の収穫で済ますそうとすると赤く完熟する前の青い豆も混じってしまうというのがスリランカのコーヒー豆であった。
これを劇的に改良したのが、先にも述べた「ラクパラクン」である。コーヒー生豆の改良の成功だった。ラクパラクンという歴史上のスリランカの王様の名前を冠し、10 年ほど研究しスリランカのコーヒー品質を改善する生豆ができたのである。

海外貿易に適したセイロンコーヒー豆復活を目指すスリランカにとっては、貴重な外貨獲得コーヒーの可能性のあるラクパラクンだ。

収穫の手間を少なくした改良コーヒー豆「ラクパラクン」。

ラクパラクンの木（左）、チェリー（中）、加工済の生豆（右）。
チェリーは赤く熟している期間が長いため、収穫に行く回数は 1 シーズン 2 回程度で済む。
また、生豆は Catimor と比較してサイズが大きく、若干平面的な形をしている。

スリランカ政府農業輸出局は、農民の生活向上と同時にコーヒーを貿易品にするために、このラクパラクンのコーヒー苗を配布し、コーヒー生産を奨励している。

私がスリランカへ足しげく通ったのは、かつてコーヒーという一大産業を誇ったスリランカの歴史の尊厳を重要視していたからだが、農民は自国の過去のコーヒーの歴史より、目の前のコーヒーによる収入にしか関心がなかった。それも当然である。人間であれば誰でもそうだろう。農民は今日、明日の生活が良くなること、いかに食べていくか、教育や医療が受けることができるかが一番の関心だ。

あるとき、スリランカ政府関係の高官が、私のコーヒー復活の活動について疑問を呈したことがあった。「コーヒー復活とは、紅茶をなくして、コーヒーに変えることか？」と聞かれた。その裏には現在の紅茶農民はどうなるのか？ ということも聞いていたのである。

スリランカコーヒー復活は、紅茶をなくすことを目指しているわけではない。私自身の思いは、コーヒーを通してスリランカという国の歴史を復活させること、そして紅茶とコーヒー両方が成り立って、スリランカの経済に貢献することである。スリランカ農民にとっては、紅茶にしてもコーヒーにしても、生活ができるようにするためである。

セイロンコーヒーは、もはや世界のコーヒー市場からなくなり、スリランカでも忘れ去られていた。しかし、かつてこのセイロンにあったコーヒーを、スリランカに再びよみがえらせ、世界のコーヒー市場に登場するようにする。スリランカ国が過去そうであったように、セイロンコーヒーという大切な資産を復活させることである。

スリランカコーヒー復活は、スリランカにとって新たな事業、かつ産業であり、農民を豊かにすることは

もちろん国家にも利益をもたらす。国のプロジェクトとしてコーヒーを再び産業にするために、国家としてスリランカコーヒーを魅力あふれるロマンのある事業への展望を見つけることを目指している。

6. スリランカ人のコーヒー事業

スリランカに足しげく通い、活動を進めるうち、私のまわりには志あるスリランカ人が集まり始めた。最初は DEA（農業輸出局）の人々、そして、貿易の EDB（貿易輸出局）、IDB（工業局）、そしてシンハラ人の青年たちが作った KCC である。この 3 つの政府局は我々のスリランカコーヒー復活の方向に沿って機能し始めている。

KCC は、名前はキヨタコーヒーカンパニーと私の名前を付けているが、この法人の実態は完全にスリランカ人のものだ。運営の実際は彼らによって、なされている。先に言った政府の3つの局の人たちは、過去、セイロンがコーヒーで繁栄した歴史を知り、自ら立ち上がり、動き始めたスリランカ人への支援として行っている。

スリランカが過去、ポルトガル、オランダ、イギリスと、列強の支配を受け続けたのはなぜか？　それはスリランカが世界でも恵まれた豊かな国であったからに他ならない。

もともとスリランカは、森林と多様な生物、様々な熱帯の自然が織りなす恵まれた環境にあり、植物は多種多様に存在する。世界的遺産も多数存在する。その中心に仏様の歯のある仏歯寺があり、キャンディの街は世界遺産の由緒ある都市である。さらに優良な港が幾つもある。

スリランカ人たちは、過去自国の歴史にあったコーヒーの事実を誇りとし、コーヒー復活を崇高な任務と感じて、再び新たなコーヒー歴史をつくろうとしている。

スリランカコーヒー復活を追いかけてきたが、私はいま、復活の確かな手ごたえを感じている。このスリランカコーヒー復活を、さらに確固とした事業として根付かせるための KCC である。
KCC は 2017 年 1 月、スリランカの地にスリランカ人により設立された。

私は会社 KCC のチェアマンだが、KCC はキヨタの名前の頭文字で彼らが命名し、実際のコーヒーの仕事もすべてスリランカ人がやっている。ただ、日本からはコーヒー製造に関して、ローストマシン、グラインドマシン、パッケージなど様々なサポートをしている。

強調したいのは、スリランカコーヒーは、スリランカ人が自ら会社の運営をやっていることである。KCC ではスリランカの田舎にあるコーヒー農家からコーヒー豆の買付、焙煎、粉砕加工、販売までコーヒー業務をすべて彼らがやっている。政府からコーヒー工場として、認められ、銀行の取引もできるようになっている。

2018 年 12 月 14 日から 20 日までのスリランカ訪問で驚くことがあった。それは、スリランカ政府がスリランカコーヒーの復活に本気で乗り出したことである。政府貿易輸出局（EDB）がコーヒーを輸出振興の産品として位置づけたのだ。

スリランカコーヒーの復活がにわかに現実味を帯びてきたような気がする。それは、政府が借款でコーヒーマシンの資金を出すということである。これから実際にコーヒーの海外貿易のために必要なことを行っていく。貿易を目指すのは 1000 トンである。それには、不足することだらけであるが、さらに努力をすることである。その実現は、いろんな形での協力を必要とする。

夢を現実に。私のスリランカでのコーヒーロマンは、スリランカの産業に貢献することである。一つはスリランカの生豆を販売し、外貨を獲得すること。もう一つはスリランカ国内でコーヒーのマーケットを作ることである。スリランカ人により運営される KCC はその目的のために設立された。

顧客が真に求めるコーヒーとは何か？　顧客ニーズは何か、価値を発信し、その価値を効果的なものにするために、哲学を持った戦略と仕組みが必要である。

スリランカの現地法人 KCC（KIYOTA COFFEE COMPANY）のスタッフたち。

豆の選別や焙煎など、コーヒー生産では近隣に住む女性たちが活躍。大事な収入源になっている。

コーヒー生産から取引先の開拓、プロモーション活動など、すべてスリランカ人の手で行っている。

第3章 スリランカコーヒーのブランド化

1．世界のコーヒーとなる３つの要素

スリランカコーヒーの価値を創造しブランド化し、世界の人から称賛されるコーヒーにする。スリランカコーヒーを世界中の多くの人に飲んでもらい、愛されなければならない。そのためにはスリランカコーヒーのプロモーションのイメージブランド化が大切だ。スリランカコーヒーがブランドコーヒーとして、世界のコーヒーとなる３つの要素を次に述べる。

理由① 自然林に育つスリランカコーヒー

植民地政策によるコーヒー生産は、単一農産品であったため、さび病によってセイロンコーヒー滅亡のきっかけになったが、今度復活させるコーヒーは小農民による多品種生産の中の一つである。

ここに関わる日本フェアトレード委員会は、小農民による生産農家を守るために、良質豆の生産奨励とフェアトレードの啓蒙をおこない、小農家コミュニティの形成を目指す。さらに、農民の納得する価格の豆の買い取りを行う。これは、プランテーションのもと行われる自然林の伐採はしない、自然を残しながらのコーヒー栽培とする。

小農民によるアラビカコーヒーの生産は、多く見積もっても 100 トンを超えないと思えるが、現在日本にスリランカから年間１トンも生豆輸入はない。日本の 2018 年の生豆輸入量は 40.1 万トンである。輸入単価はブラジルが１kg 363 円で、最も高い価格を付けているのは、ブルーマウンティンの１kg 3125 円、輸入量は 357 トンである。スリランカコーヒーはそのブルーマウンティンコーヒーと比べてもひけをとらないコーヒーである。

ブルーマウンティンは、カリブ海の小さい島国で、スリランカは同じようにインド洋に浮かぶ小さな島国だ。サファイアやルビーなど宝石の国でもあり、スリランカ中央部の 1000m を超える熱帯の滋味豊かな土地でコーヒーは生産される。コーヒー鑑定でも良質な美味しいスペシャリティコーヒーと評価されている稀少なコーヒーで、宝石の島のイメージとも重なり、スリランカコーヒーのイメージは良い。

また、もう一つイメージが良くなるのは、スリランカコーヒーのストーリーである。世界のコーヒーに例のないコーヒー復活の物語は、世界のコーヒーブランドになるための要素に十分成りえる。

過去の歴史にあったセイロンコーヒーは、今や幻となっている。歴史から消えたものは後に誤った形で喧伝されるのがしばしばである。しかし、過去スリランカでセイロンコーヒー生産が世界第3位を誇ったことは、厳然たる事実である。

理由② 歴史を持つスリランカコーヒー

３つの国に支配され生き残った世界に稀なスリランカコーヒーは、大航海時代、ヨーロッパの西にあるポルトガルの海洋進出から始まり、オランダがセイロンに進出した。その目的はコーヒーを栽培し、コーヒーを自前の貿易品にすることだった。貿易を目的とした東インド会社がヨーロッパで起きたコーヒーハウスのコーヒーの需要にこたえるために、ヨーロッパへのコーヒー貿易をモカコーヒーだけでなく、セイロンコーヒーにも目を付け、1658 年に栽培を始めた。

栽培から貿易の完成までは難航し、セイロンコーヒー貿易が開始したのは 18 世紀になってからであった。

毎年１万ポンドから９万ポンドのコーヒー豆がアムステルダムに輸出された。ちなみに１万ポンドは 4.54 トンなので、貿易量は９万ポンド、最大の年で約 40 トンだった。

セイロンコーヒーの貿易量は多い時で 1741 年には年間 37 万ポンドだったとあるから、トンに直すと 168 トンがオランダのアムステルダムの港に運ばれた。

1800 年になるとセイロンはオランダから変わりイギリスの統治下になった。イギリスはセイロンコーヒー栽培を植民地経営として、1820 年ジョージ・バードがキャンデイでコーヒープランテーションを始めた。1823 年にはガンポーラのシンハピティヤでもコーヒープランテーションが始まり、コーヒーはセイロンの最も重要な輸出産品になった。

1827 年に輸出量 80 トンだったものが 1836 年には約 5630 トンにまで増加し、1841 年コリン・キャンプベル卿が植民地領事となり、彼の時代に内陸部のアップカントリ―のヌワラエリヤの地域でコーヒープランテーションは拡大した。1847 年には１万 5000 トン、大増産を重ね 1870 年には５万トンを超える量に達した。1858 年セイロン鉄道が始まったのは、コーヒーをコロンボ港に運ぶためだった。

このようにセイロンのコーヒー生産は 1820 年のキャンディのプランテーションから 50 年後まで急速に増加し、1870 年にはセイロンコーヒーはブラジル、インドネシアに次いで世界第３位になった。セイロンの国土面積はブラジル、インドネシアと比べると圧倒的に小さいにも関わらず、２つの大国に次ぐコーヒーの大生産地となった。

理由③ セイロンコーヒー滅亡から救世主の豆の復活

セイロンコーヒーを一番の産業にしたのはイギリスだったが、それをなくしたのもイギリスであった。1870 年頃がセイロンコーヒーの生産のピークで、それ以降セイロンコーヒーは、サビ病にかかったから滅んだという説が世の中に通ってしまっている。しかしそれは俗説で、本当はイギリスがセイロン紅茶へと政策転換したものと思われる。セイロンコーヒーは一度になくなったのではなく、30 年～ 40 年かけてなくなったのである。

実際にセイロンコーヒーの貿易数字は、1870 年の５万トンから 1889 年には 4500 トンにまで減少してしまっている。作り育てるのに数百年かかったセイロンコーヒーであるが、なくなるのは早かった。

コーヒーの木は収穫をされず、放棄されたコーヒーの木は伐採され紅茶の木に植えかえられていった。伐採されたコーヒー農園は、一瞬のうちになくなってしまうものだ。アマゾンなど世界の熱帯雨林は伐採により著しく減少しているのも、このセイロンコーヒー滅亡の例をみても分かる。

伐採し紅茶にするためには、多くの労働力を必要とした。イギリスはシンハラ人の労働力は使わず、茶園労働のために南インドから強制的にタミル人を連れてきた。

セイロンコーヒーの最盛期、コーヒー農園の面積は 10 万ヘクタールを超えていた。コーヒーの木の植栽数はざっと計算しても３億本くらいあっただろう。そんなセイロンコーヒーだったが、栽培面積は（表 1）でわかるが、1877 年から減少の一途をたどった。

イギリスのセイロンにおいてのコーヒー産業から紅茶産業への転換の時代であった。それはセイロンにとっては、新たな紅茶産業の勃興でもあった。そのようなとてつもない産業の大転換ができたのは、すべて現地のセイロンを意のままにできたイギリスの植民地支配のためだった。

このような歴史と、地理的条件とを持つコーヒーは世界にどこにもないのである。このような一度なくなったコーヒーが再びスリランカから生まれたとなるなら、それこそ歴史の奇跡のような出来事と言える。

さらに、スリランカ国にとってはコーヒーという新しい産業が生まれたということである。スリランカにとっては、コーヒーは救世主である。

まさに、救世主となるそのブランドコーヒーの生豆がナチュラルコーヒーに届いた。自然の中で育った豆は、プランテーションで育てられた品のよいきれいにそろった豆と違い、見た目からしてワイルドである。

2019 年７月、ナチュラルコーヒーに届いたスリランカコーヒー。
麻袋を見ると、スリランカの中の産地区分、dry 乾燥式、wet 水洗式の区別がされている。自然林に囲まれた中で育った、深みがありスリランカらしいコクのあるコーヒーである。

スリランカコーヒー 1000トン産業化の夢と希望　シリーズ①

スリランカコーヒーを世界のブランドコーヒーへ

◆

発行　2019年10月1日

◆

著者　清田 和之

一般社団法人 日本フェアトレード委員会 理事長

〒861-5521 熊本県熊本市北区鹿子木町98-4

TEL・FAX　096-245-4545

http://www.fairtrade-japan.org/index.html

※facebookでも情報発信中！

fairtrade-japan@bridge.ocn.ne.jp

◆

編集　神原 里佳